



# 「全てが必然」

## 「挑戦」と「つながり」

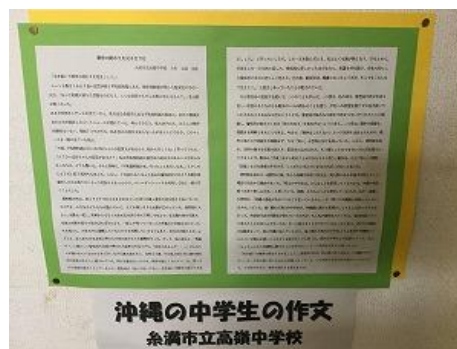
6月23日が何の日か、皆さんは知っていますか。

「慰霊の日」と呼ばれており、第二次世界大戦において多くの尊い生命が失われた歴史的事実を厳粛に受けとめ、戦争が再び起こることのないよう、恒久の平和を強く願うとともに戦没者の霊を慰めるため、沖縄県の条例で定められた日です。まさに、沖縄の人たちにとって忘れることができない日といえます。

毎年、沖縄では現職の総理大臣等の要人を迎え式典が開催され、たくさんの児童生徒も平和を願い詩や作文等を創作しているそうです。今年その中で中学校の「作文」部門で最優秀賞を受賞した生徒が、本校3年生が修学旅行前にテレビ電話で交流した糸満市立高嶺中学校の生徒の玉城美夢さんでした。



高嶺中とテレビ電話を使って  
交流している様子



『戦争の終わりを見るまでは』  
玉城美夢さんの作文

玉城さんは戦争を体験した曾祖母の証言文が平和祈念資料館に残っており、それを読んで学んだ2つのことを中心に作文で思いを述べています。また、早島中との交流によって、「もっとしっかり沖縄戦に関することを学びたい」という気持ちが強くなったと述べています。そしてこの作文のタイトル「戦争の終わりを見るまでは」には、玉城さんのどのような思いが込められているのかを想像して読んでほしいと思います。我々もこの貴重な交流を通して、これからの時代をどう生きていくべきか、しっかりと考えるきっかけにしてほしいと願っています。

裏面に記事を掲載しますので是非、ご一読ください。(校内にも掲示されています) いずれにせよ、初めての「挑戦」(県外の学校との交流)が二つの学校を、そして忘れてはならない過去の教訓(戦争の恐ろしさ、平和の大切さ)を未来へとつなげていっています。まさに挑戦とつながりです。今後も様々な分野で新たなことに挑戦し、そこから意義ある学びへつなげていきたいですね。

## 早島中の「当たり前」とは・・・

いろいろな時間帯に校内を見て回っています。授業では難しい問題に仲間とともに考えあっている姿やクラスメートの発表をもとに学びを深めている姿を見かけます。定期考査前ですから放課後残って先生とともに勉強している生徒の姿も見かけます。勉強だけでなく生徒は様々な場面で一生懸命です。見ていてそれを強く感じるのは清掃時間です。校長室前の廊下を掃除している生徒、階段の床を磨いている生徒、トイレの床をきれいに掃除している生徒、今までいろいろな学校で掃除している生徒の姿

を見てきましたが、こんなに一生懸命取り組んでいる姿はあまり見たことがありません。**先生が見ていなくても当たり前のように黙々と掃除に取り組んでいる**のです。



よく見るとそこには3年生が真剣に取り組む姿が……。月並みですが**当たり前前**のことが**当たり前前**にできることってすごいことです。良いことは見習って、みんなで「**誰もが行きたい素敵な学校**」にしていきたいですね。

### 読書は「心の栄養」……

校内を見て回るときに、私はよく「学忠館」（我が校の図書室のことです）へ行きます。とても居心地が良く心が癒されます。昨年9月からはパソコンで本を簡単に検索することができるようになっており、希望があれば町の図書館の本も借りることができます。また、町のバックアップもあり、たくさん新たな本を購入しています。学忠館には本を読みたくなる工夫がたくさんされています。



**新刊紹介コーナー**

**生徒が本を紹介しています**

**新聞も自由に読めます**

そのせいか、学忠館の本の貸し出し冊数は29年の4・5月は320冊でしたが、30年の4・5月は677冊と倍増しています。読書は感性を育み、心を豊かにしてくれます。今は期末考査で余裕がなかなかないと思いますが、来月20日から夏休みに入ります。是非、生徒の皆さんにはたくさん本を読んでほしいと思います。

### 部活動指導員、新たに2名配置

部活動を支援してくださるスタッフが早島町で導入されていましたが、今年度新たに2名が加わりました。なお、以前も説明させていただきましたが、部活動指導員は顧問の先生方を補佐するとともに、教員がいなくても一人で生徒を引率したり、指導したりすることができることとなっています。今後も部活動指導員の方々とともに、部活動の充実に努めていきたいと思っています。

それでは、新たな仲間を紹介させていただきます。

バスケットボール部 笹井 謙一さん  
美術部 柳沢 通代さん

## 戦争の終わりを見るまでは

糸満市立高嶺中学校 3年 玉城 美夢

「生き抜いて戦争の終わりを見ましょう。」

シーンと静まりかえり重い空気が漂う平和資料館にある、戦争体験者が残した証言文の中の一文だ。「なんて希望に満ちた言葉なのだろう。こんな状況でもそんな風に思えるなんて。」私は胸が熱くなった。

ある日何気なくテレビを見てみると、私の住む糸満市にある平和資料館の館長に、初めて戦後生まれの方が就任したというニュースが流れていた。考えてみると、私の身内にも、ほとんど戦争体験者はいない。戦後73年がたち、私を含めた戦争を知らない人がほとんどである。このニュースを一緒に見ていた母が、

「今度、平和資料館にひいおばあちゃんの証言文があるから、読みに行こうね」と言ってくれた。

「え？ひいばあちゃんの証言があるの？」私は平和資料館に曾祖母の証言文があることは知らなかったため、とても驚いた。それと同時に、「平和資料館かあ。行ったことあるしなあ。」と少しめんどうだと思ふ気持ちもあった。しかし、7年前になくなった自分の曾祖母がどのような戦争体験をしたのか知りたいという気持ちもあったので、ゴールデンウィークを利用して母と一緒に行くことにした。

資料館の外は、色とりどりで大小さまざまなこいのぼりが真っ青な大空を悠々と泳いでいた。その下を、小さな子どもたちが遊んでいて、とても楽しそうな光景が広がっていた。資料館に入ると、光景は一変し、米軍からもらったあめ玉を赤ん坊に口移しで与えている父親の姿の写真や、米軍の攻撃を受けて体がばらばらになり、一部しか残っていない人の写真などが展示されていた。その他にも、がまの中に避難している人たちを再現しているものもあり、泣き声が聞こえないようにと、赤ん坊の口を必死に押さえる母の姿がとても衝撃的だった。そして、先に進むと、「長嶺オト」と懐かしい曾祖母の名前が書かれた証言文を見つけた。「本当にあるんだ・・・。」どんなことが書かれているのかドキドキしながら読み進めると、当時33歳、今の私の母と同じ歳の曾祖母の証言が生々しく綴られていた。特に印象的だったのは、戦争が激しくなっていく中、苦しきから自殺を図ろうとしている人に、曾祖母が「死んではいけない。生き抜いて戦争の終わりを

見ましょう。」と言ったところだ。この一文を読んだとき、私はとても胸が熱くなり、手をとめて、何度もこの一文を読み返した。曾祖母も苦しかったはずなのに、希望を持ち続け、命を大切にされた曾祖母が本当に誇らしく思えた。その後、曾祖母は、捕虜になったようだが、そこでも「みんな生きよう。」と励ましあっていたことが記されていた。

私は曾祖母の証言文を読んで、二つのことを学んだ。一つ目は、私の命は、曾祖母が自分自身も苦しい状況にありながらも戦争がいつか終わることを信じ、平和への希望を捨てずに生き抜いてくれたからこそあるものだという事だ。曾祖母が私たちひ孫まで命をつないでくれたことに感謝し、曾祖母が教えてくれた「命の大切さ」を忘れずにいようと思う。二つ目は、戦争の悲惨さ、残酷さを理解できたことである。今まで、「戦争はしたくない」という気持ちはあったものの、戦争の愚かさや残酷さを理解せず、ただ「怖い」と恐怖心だけを持っていた。しかし、資料館を訪れ、当時の様子を写真で見たり、証言文に込められた、もう聞くことのできない声に耳を傾けたりすることで、戦争の「中身」を少し知ることができたように思う。戦争を、ただ「怖い」「残酷」「悲惨」などの言葉で片付けず、しっかりと学んでいかなければいけないと思った。

資料館を訪れた一週間ほど後、私たち高嶺中学校3年生は、岡山県にある早島中学校とテレビ電話で交流する機会があった。「岡山の中学生は、どんなことを質問してくるのかな。沖縄の特産物？方言？楽しみだな。」と思っていた。実際、「それらのことも質問してくれたが、私が一番驚いた質問は、「沖縄に基地があることをどう思っていますか。」や「周りに沖縄戦を体験した人はいますか。」だった。遠く離れた岡山の中学生が、沖縄戦に関する質問をしてくるとは思ってもみなかった。生徒会代表の同級生が答えていたのだが、もし私が質問されていたら、基地問題について考えたことがほとんどないため、きっと答えることができていなかったと思う。身内に沖縄戦の体験者もいて、現に沖縄に住んでいるのに、遠く離れた県外の中学生よりも基地や沖縄戦のことについて関心が薄いことはとても恥ずかしいと思った。県外の中学生との交流によって、私は「もっとしっかり沖縄戦に関することを学びたい」という気持ちがさらに強くなった。

「生き抜いて戦争の終わりをみましよう。」曾祖母の声は、私の胸に深く刻まれ、「沖縄戦を学びたい」という私の強い思いを支える言葉となっている。この気持ちを私は持ち続けていけるだろう。この世の中から、戦争の終わりを見るまでは。